

令和 3 年度

---

---

小 論 文

---

---

10 : 30 ~ 12 : 10

教養学部学校教育学科  
一般選抜(中期日程)

注 意 事 項

1. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 解答用紙は 2 枚あります。1 枚は下書きに、1 枚は清書に使いなさい。  
提出は 1 枚だけです。
3. 合図があったら、解答用紙の指定欄に受験番号を記入しなさい。
4. 落丁、乱丁、印刷不鮮明、汚れの箇所を見いだした場合はすみやかに  
申し出なさい。
5. この冊子は、持ち帰ってさしつかえありません。
6. 試験終了の合図があったら、筆記用具をただちに置いて下さい。

課題文を読んで、以下の設問に答えなさい。

### 課題文

我々は、人間であるかぎり、誰の心の中にも「エゴ」がある。その「エゴ」は、常に、「自分を守ること」や「自分に有利になること」「自分が得すること」を求めて動くため、「エゴ」の動きに身を任せていると、物事を見る視点や考える視点が、必然的に「自分中心の視点」、すなわち、「自己視点」になってしまう。

特に「エゴ」の強い人は、その傾向が強くなってしまう。

では、我々を「自己視点」に陥らせてしまう心の中の「エゴ」に対して、どう処すれば良いのか。

そのために、まず理解しておくべきことは、「エゴ」は消せないということである。

たしかに、心の中の「エゴ」は、我々を「自己中心の視点」に陥れてしまう厄介な存在であるが、とはいえ、我々は、この「エゴ」を消すことはできない。もし、それを無理に消そうとしても、一時、心の表面から姿を隠すだけで、必ず、また別なところで厄介な鎌首をもたげてくる。

では、どうするか。この厄介な「エゴ」というものに、どう処すれば良いのか。

実は、この「エゴ」に処する方法は、一つしかない。

否定も、肯定もせず、ただ、静かに見つめる。

すなわち、心の中の「エゴ」が動くとき、もし、我々が、「ああ、自分の心の中のエゴが動いている、エゴが叫んでいる」と、否定も、肯定もせず、ただ静かに見つめることができるならば、そのとき、不思議なほど、心の中の「エゴ」の動きは鎮まってしまう。そして、「自己中心の視点」に拘束されている意識が、変わっていく。

しかし、この「エゴ」を静かに見つめる「ということができるようになるためには、実は、自分のエゴを静かに見つめる」もう一人の自分」、すなわち、「静かな観察者」とでも呼ぶべきもう一人の自分が、心の中に生まれてこなければならぬ。

こう述べると、極めて難しいことを述べているように思われるかもしれないが、世の中を見渡して、「成熟した精神」を持っている人は、誰もが、この「静かな観察者」と呼ぶべきもう一人の自分を、心の中に持っている。そのことを象徴するのが、世の中ではしばしば使われる、対極的な次の二つの言葉である。

「あの人は、自分が見えていない」

「あの人は、自分が見えている」

すなわち、前者の「あの人は、自分が見えていない」という言葉は、周りから見ていると、その人が、心の中の「エゴ」に振り回されていることが分かるのだが、本人は気がついていないという状況で使われる言葉である。

一方、後者の「あの人は、自分が見えている」という言葉は、その人が、自分の心の中の「エゴ」の動きが見えており、だから、周りの人間からも安心して見ていられるという状況で使われる言葉である。

このように、「自分が見えている人」は、心の中に、自分を見つめる「もう一人の自分」<sup>11</sup>「静かな観察者」がいるのであり、その自分は、「自己中心の視点」に陥りそうなとき、誰か他の人に言われるまでもなく、

「もっと、相手の立場になって考えてみるべきだ……」

「誰もが、自分のように考えるわけではない……」

「これは、少し、自分中心に偏った考え方ではないか……」

といった警句を、心の中で発してくれるのである。

何年前か前、朝のテレビ番組にコメンテーターとして出演していたとき、丁度、その番組が始まる時間に、都内で、警察が出動する犯罪事件が起<sup>12</sup>こり、急遽、番組を<sup>急いで</sup>実況中継に切り替えて放映した。

そのとき、番組を担当するプロデューサーが語った言葉が、心に残っている。

「この事件で被害に遭われた方のことを考えると、こんなことを言っ<sup>13</sup>てはいけません。番組的には、有り難いタイミングでの事件でした……」

この言葉を聞いたとき、一人の写真家のことを思い出した。

それは、「レンズの眼を持つ哲学者」と呼ばれる戦場写真家、ジエームズ・ナクトウエイ。いまも世界各地で様々な戦争が引き起こされているが、彼は、そうした苛烈な戦場に身を投じ、極限の状況にある人々の姿を写真に収め、戦争の悲惨を世界に伝え続けてきた。

その彼の活動を伝える映画、『戦場のフォトグラファー』において、ナクトウエイは、次の言葉を語っている。  
写真家として最も辛いのは、

他の誰かの悲劇で得をしていると感じることだ。

この考えは、常に私につきまとう。

人々への思いやりよりも、個人的な野心を優先すれば、

私は、魂を売り渡すことになる。

人を思いやれば、人から受け入れられる。

そして、その心があれば、私は、私を受け入れられる。

ナクトウエイが内省的に語る、この言葉を聞くとき、我々は、自分の心の中にある密やかな野心やエゴの存在に気がつく。そして、そのとき、ナクトウエイという人物の強さが、いかなる強さであるかを理解する。

自分の心の中の野心やエゴの姿が、見えている。

それが見えているからこそ、流されない。

それは、彼だけでなく、我々人間にとつての「真の強さ」であろう。

そして、その意味で、冒頭のテレビプロデューサーもまた、自分の心の中が見えているからこそ、あの言葉を、自戒を込めて語ったのであろう。

しかし、最近のテレビや雑誌を見ていると、「他人の不幸や悲劇」を売り物にすることへの自戒が失われているように感じるのは、筆者だけではないだろう。

だが、そのことを嘆きながらも、テレビの視聴者であり、雑誌の読者である、自分自身の心の中を見つめてみるならば、そうした番組や記事に、つい目を向けてしまう「もう一人の自分」がいることにも、気がつく。

そうであるならば、テレビや雑誌というメディアの現状は、決して「メディアの墮落」といった簡単な言葉で表現できるものではない。

いずれ、メディアと視聴者、読者は「一对の鏡」

我々の心が、メディアに影響を受けるだけでなく、我々の心の在り方が、メディアの姿勢を引き出している。それも、もう一つの真実であろう。

そのことを考えるとき、昔から密やかに語られる一つの言葉の怖さを、改めて思う。

「他人の不幸は、蜜の味がする」

この言葉に示される、我々の心の中の「小さなエゴ」

それは、誰の心の奥深くにもある。

されば、もし我々が、真に「他者への共感の心」を大切にしたいのであれば、その前に、我々は、心の奥深くに潜む、この落とし穴を見つめなければならない。

出典…田坂広志『直観を磨く 深く考える七つの技法』(二〇二〇年 講談社)ただし一部を改変した。

設問一 傍線部アで、筆者は「エゴ」というものに、どう処すれば良いのか。」と述べていますが、筆者は「エゴ」について、どう処

すれば良いと考えていますか。課題文に即して、二〇〇字以内で説明しなさい。

設問二 傍線部イで、筆者は「心の奥深くに潜む、この落とし穴を見つめなければならない。」と述べていますが、あなたはこれにつ

いて、どう考えますか。課題文を踏まえながら、あなたの考えを、自分の体験や見聞を交えて八〇〇字以内で述べなさい。